



## 羅針盤

塩原 哲夫

*Tetsuo Shiohara*

杏林大学医学部皮膚科  
Visual Dermatology 編集委員



## 病気は人生の変遷にも似て

『小さな村の物語 イタリア』というTV番組がある。イタリアの小さな村に住むさまざまな人々の生活を紹介する番組であり、そこに登場する人々の多くは農作業や手工業に従事している。その村で生まれ、一生その村で過ごす名もない人々の生活は、都会で暮らすわれわれからみると、何と質素で慎ましやかなことか。こういう人々の生活をみていて思うのは、十年一日のごとく変わらないようにみえる生活の中に、実は大きな転機や変化が潜んでいるという点である。

若いころは刺激を求めて都会に出ていったり、華やかな仕事についたりした青年たちが、ある年を迎えると村に帰ってきて、親の仕事を受け継いだりして地道な生活をするようになる。こういう人々の現在の姿を若き日の写真と比べてみると、年はとっていても、若いころより人生の年輪を積んでよい顔になっている。彼らは同じ仕事を地道に続けることで、物事の本質をつかんでいく。中には、一時的に脚光を浴びたものの寂しい晩年を迎え、失意のうちに死んでいく人もいる。誰しも幸せになりたいと願って行動しても、巡り合わせが悪くどんどん不幸になっていく人もいて、まさに人生さまざまである。

こういう人々の変遷の歴史を学ぶほどに思うのは、われわれには同じようにみえる疾患でも、その症例には症例なりの歴史があるということである。現代の臨床医学は、その症例の示すさまざまな異常をパターン化し、それを体系づけることにより形作られてきた。皮膚科でい

えば、臨床症状の形態が似ているものをまとめ、それに一つの病名を与え、それがあたかも独立した一つの病態であるかの如き、錯覚を与えることで成り立ってきたともいえる。

しかし、そこには“疾患を時間軸で考えていく”という視点が消えがちとなる。その結果、皮膚科医はいったん診断が確定すると、別の疾患とされたものとの違いは考えるものの、その診断された疾患の中でも“病態は絶えず変化している”ということあまり考えなくなる。このような現代臨床医学の欠点は、自分の眼で皮疹を視ることから真理を学ぶのではなく、書物を読んだり人から聞いたりしたことから学ぼうとする現代の医学教育により、増幅されることになる。こうした教育はある程度のレベルの人を育てるにはよいのだが、考えが硬直化し柔軟な発想をもてなくなるという欠点をあわせもつ。冒頭に述べたイタリアの農村の人々の生活をみていて感ずるのは、十年一日のごとく変わらぬ生活をしているように見えながら、彼らは自然と向き合って生活しているため、書物からではない自らの体験から物事の本質を学びとっているという点なのである。

本特集号は、一つの症例を長期間観察し続けることでしか学べない“疾患の本質”を、教科書的な記述ではなく、観察し続けた医師のナマの声を聞くことにより学ぼうとするものである。ここには年代もののワインのように、時間をかけねばわからなかった真理がある。